

研究ノート：

## 自助・自己責任の時代における新たな支援のあり方を考える －福祉的課題を抱えた人の「支援を求める力・受ける力」の可能性に着目する－

横山順一 高木健志

### Examination of the Way of the New Support in the Times of Self-Act, the Self-Responsibility

Junichi YOKOYAMA Takeshi TAKAKI

#### 要約

児童虐待や貧困、孤立死等の深刻な社会問題をはじめ、子育て支援や高齢者・障がい者の介護等、日常生活の中には多様な福祉的課題が発生している。社会全体の複雑化、多様化、グローバル化が進む今日、支援を必要とする対象やサービスは、量的な拡大と質的な複雑さを増している。わが国にはこうした課題の解決のために、様々な福祉的支援のメニューが整備されてきたが、単にサービスや制度が増大するだけでは、真にニーズを有する当事者達に、その支援の手が差し伸べられるわけではない。

そこで、注目したのが、自助・自己責任が声高に言われる今日、多様な福祉的課題を抱えながらも他者に支援を求めない、あるいは支援を求められない当事者たちの存在である。また、与えられた支援を受け入れるだけの必要な力を当事者が有しているのかといった視点も含めて、当事者の特性を考慮に入れた上で支援のあり方を検討する視点を見直し、研究を積み上げることが求められている。

そこで、本稿では、福祉的課題を抱えた当事者の「支援を求める力・受け入れる力」の可能性に着目し、自助・自己責任の時代における新たな支援のあり方を構想することを目的に考察した。

#### Abstract:

Including serious social problems such as child abuse and poverty, the isolated death, a problem of a variety of welfare occurs in the everyday life such as the care of child care support and an elderly person, the person with a disability. An object and the service to need support today when complexity of the Great Society, diversification, globalization advance add to quantitative expansion and qualitative complexity. A menu of the support of various welfare has been maintained for the solution to such problem in our country, but a hand of the support is not held out to people concerned having needs truly only by merely service and systems increasing.

Therefore it is the existence of people concerned whom "I do not demand support" from others while what I paid attention to has a problem of a variety of welfare or "support is not demanded" from. In addition, I review a viewpoint to examine the way of the support after having taken the characteristic of the person concerned into account including a viewpoint whether the person concerned has the necessary power that only accepts given support, and it is demanded that I pile up a study.

In this report, I paid my attention to possibility of "the power of help-seeking & the power to receive for the support" of the person concerned with a problem of the welfare and considered the way of the new support in the times of self-act, the self-responsibility for the purpose of elaborating a plan.

キーワード：求援力, 自助, 自己責任

Key Words : power of help-seeking, self-help, self-responsibility

## I はじめに

今日、私達の社会は、複雑化、多様化、グローバル化が進み、支援を必要とする対象は、量的な拡大と質的な複雑さを増している。子どもや障がい者、高齢者に対する虐待や貧困、養育困難、社会からの孤立、子育て支援や高齢者・障がい者の介護など、生命を脅かすような深刻なものを含め、日常生活の多様な場面において福祉的課題が発生している。福祉的課題を抱えた当事者は、その課題の解決・軽減のために支援を必要としている。

そこで、わが国ではこうした多様な課題の解決、軽減を図るために、今日に至るまで多くの法・制度が整備され、福祉サービスといった多様な支援が提供される環境が整えられてきた。福祉的課題を抱え支援を必要とする当事者は、その支援と接点を持つことにより、彼らが抱える生活問題の多くを解決したり、軽減したり、少なくとも課題が改善させる何らかの糸口は見つけられるものと思われる。

では、その当事者と支援との接点は、どのようにしてつくられるのか。また、その接点は、誰しもつくることができるのか。

わが国の福祉サービスのほとんどは、支援を求めてくる人に対して提供される。生活保護の受給、介護保険サービスや障がい福祉サービスの利用、保育所の入所など、そのほとんどが原則として当事者の申請や申し込みをもって手続きが始まる。何らかの福祉的課題が発生しても、支援を求める力を持つ当事者は、支援との接点をつくることができ、課題の解決・軽減を図ることができるであろう。しかし、何らかの理由で他者に支援を求める力を持たない当事者は、福祉サービスとの接点をつくるのが非常に困難である。

また、福祉サービスとの接点を見いだせたとしても、「自分のことは自分ですべき」「自分が頑張らないといけない」「他人の指図や意見は聞きたくない」といった固定観念やこだわりから、支援を受け入れるまでに時間がかかる。支援を受けられない、などの何らかの理由で支援を受け入れることができない人は、自身が抱える福祉的課題を解決・軽減に導くのが非常に困難になる。

上述のような問題意識から、本稿では、福祉的課題を抱えた当事者の「支援を求める力・受け入れる力」の可能性に着目し、自助・自己責任の時代における新たな支援のあり方を構想することを目的に考察したので報告する。

## II 「支援を求める力」、 「支援を受け力」に関する先行研究の概観

支援を受ける側である当事者の視点として「支援

を求めること」「支援を受け入れること」についての研究は、福祉分野外の多様な領域において見られる。

わが国において、「支援を受けること（受援）」に対して、深く関心を寄せるきっかけになったのは、1995年の阪神・淡路大震災であろう。戦後未曾有の大災害時に、被災者に対する全国各地からのボランティア活動や応援物資の受け入れをどのように行うかといった課題に我々は初めて直面した。その後、この「支援を受け入れること」のあり方について国レベルでの検討を経て、2010年内閣府（防災担当）が被災地で防災ボランティアの支援を円滑に受け入れることを促進するためのパンフレットを発行した際に、「受援力」という言葉を用いたことで、この概念は一般化した。その後、2011年3月東日本大震災が発生し、さらにその関心は高まった。

内閣府は、「受援力」について「災害時にボランティアを地域で受け入れる能力のことで、災害の被災地における、住民個人のレベルから行政レベルまでの災害ボランティアの受け入れる能力のことや、被災地側がボランティアの支援に上手に寄り添う力」と定義している。

この「受援力」に関わる研究は、地域防災学、地域安全学の分野において見られる。迅速かつ被災者団体のニーズに応じた広域支援活動を実現するために、支援する力と援助を受ける力の双方のいわゆる「総合的な支援力」の向上を図る対策が提言されている。

また、保健医療分野においては、保健医療行動科学の立場から、宮本（2015）が受援力の概念をセルフケアの観点から整理している。宮本は、「受援力とは、健康上の問題を持つ個人が問題解決に向けた支援を受け入れ活用すること」と定義し、「健康問題を抱えた当事者が、受援力を発揮できるためには、いくつかの条件が必要と考えられるが、とりわけ保健医療の専門職によると当事者支援のあり方が問われると思われる」と提言している。

さらに、福祉の分野では、妊婦の育児支援を受けるために必要な力について分析した研究（田中2011）が見られるほか、子育て支援の分野では、産婦人科医である吉田穂波が「受援力ノススメ」で、この言葉を用いている。吉田は、「受援力」について明確に定義づけてはいないが、母親としての役割遂行のためには、子育てにおいて、多少の他人からの干渉の必要性を受け入れることの重要性をあげている。

一方、「支援を求めること」に着目した研究は以下のようなものが見られる。

心理学分野では、「援助希求力」「援助希求性」「援助希求行動」「被援助志向性」「被援助行動」

といった用語が用いられて説明されている。特に教育現場において、昨今社会問題となっている「いじめ」の防止策として、被いじめ児童に「アサーション＝自己主張」できる力、子どもが大人に対して援助を求める力をつけるための取り組みの中で用いられている。

教育心理学の領域では、学校教育現場におけるいじめの防止策として、周囲に助けを求める「援助希求行動」を育むことに注目した研究も見られる（水野・石隈 1999 など）。さらに、臨床心理学の分野においてはうつ病への対応や、自殺予防の観点から、当事者が援助希求すること、抱える悩みや困難に自ら気づき、早期に対応して自殺にいたるリスクを減らして保護要因を増やす役割を担う者（＝ゲートキーパー）に対して「困難や悩みを抱える当事者から相談・援助を求める行動（＝援助希求行動）」についての意識・価値観に関わる教育が求められている。この援助希求行動に関する研究はいじめられている児童、自死遺族への支援などの文脈のなかで用いられている。

福祉の分野では、子育て期の母親における援助要請行動についての研究（小島 2007, 諸井2012, 中神 2011, 中村 2013 など）がある。永井（2016）は、それら子育て支援領域における援助要請研究について概観し、今後の課題を示している。また、近年貧困問題や虐待に関する議論（研究）においては、「助けを求めるための行動」に着目した研究が注目され始めている。

このように、支援を求める行動は「希求行動」「援助希求行動」という語が用いられ、社会心理学的観点から、具体的な行動に着目した研究が行われてきている。援助希求行動に関する研究では、希求という感情と希求のための行動についての関連で語られる場合が多い。いずれも、支援を要する当事者に行動化を求める姿勢がある。

以上、これまでの「支援を求めること」「支援を受け入れること」についてのこれまでの研究を一部概観した。受援力や援助希求行動に関する研究では、特定の事象や課題に対応するための行動として支援を求める意思決定やその行動化を利用者に求める文脈で語られているものの、当事者の属性や置かれた社会的・地理的環境等の加味した上で、当事者が支援を求める具体的な行動を引き出すことへの専門職の取り組みや、当事者の意思決定のプロセス、具体的な行動までを過程といった、生活の文脈を総合的に踏まえた分析は非常に乏しいと言える。つまり、こうあるべきだという方向性は示すことができてはいたが、生活の文脈の中で支援者が具体的にどうすべきか、という答えはまだ示せずにいるのである。

福祉実践では、支援者は「当事者本位」という理

念の具現化のために具体的な支援を日々展開している。支援者による、当事者の「支援を求める力」「支援を受け入れる力」を引き出す支援を分析することで、複雑化、多様化している福祉課題に即した支援に資する知見を得ることが重要であろう。

### Ⅲ 支援の中で「当事者の持つ力」に着目する

これまで、支援は、支援者側から提供されていくものという文脈の中でその多くは語られてきた。しかし、支援とは、当事者が置かれた状態を見ずに一方的に支援者から当事者に向けて提供されるものでは決してなく、様々な社会環境や生活実態の特徴を有した当事者が、その環境との関係のなかで、自らの意思で支援を求める決定し、それに向けての具体的な行動に移すことができる「当事者が自ら支援を求められる力」や「社会的環境を整える」ことまでをも包含しているものである。そこに支援者もかかわりあいながら、これら循環的な構造から相談支援行動をとらえることが必要である。仮に、これらを本稿では、仮説的に求援力の循環的構造について図示を試みた（図1）。

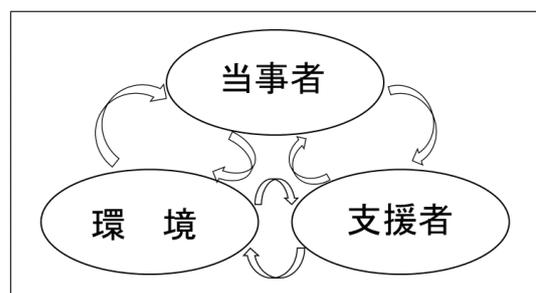


図1 求援力の仮説的循環構造

支援者と当事者とが双方向的にかかわりあっているだけでなく、当事者が自ら支援者への支援を用いて自立した生活を送ることのできる社会の構築を目指していくこととなるであろう。高木は、かかわりに関して考察するなかで、「主体性にとって主体性を持ったクライアントの存在が不可欠」（2013：44）として、当事者の持つ力を前提に考えることの重要性を挙げている。そう仮定するならば、人が何らかの課題を抱えたり抱えそうになったりしたときに、本人自らが、支援を求めたり、支援を受け入れたりすることのできる力を高めることのできるかかわりを行っていく実践力が支援者には求められてくるのではないだろうか。

当事者の力を高めることに注目した支援については、エンパワメントの概念を用いて説明されることが多かった。これまでのソーシャルワーク研究においては、支援過程におけるエンパワメントの重要性

について、概念に関する研究は多く見られる。これまでのエンパワメントは、自分自身の潜在的能力に気づき、その能力を活かして行動できるような援助を行うこととして定義づけられている。しかし、当事者が潜在的に持っている能力をエンパワーすること、周囲からの援助を受け入れる、または周囲に支援を求める力をエンパワーすることは厳密には異なるのではなからうか。これらについて、具体的な実践に着目した研究や具体的に何をどのようにエンパワーすれば支援を求める力がエンパワーできるのかということに着目した点についての先行研究は見られない。このことから、当事者をエンパワーするための具体的な実践を明らかにする必要があると思われる。

これまで支援のあり方については、支援の必要性や支援のシステムづくり、どのように支援が提供されるか、といった支援する側からの視点から多く研究されてきた。社会事業、ソーシャルワークそのものの歩みこそは、支援を受け入れられていくために支援者の中で議論・研究されてきた傾向があった。近年、福祉の多様化などさまざまな要因から、次第に、「当事者主体」の支援の考え方が中心となってきたものの、支援を受ける側である当事者の視点はまだ不足しているといえ、当事者の視点に立った支援のあり方が十分検討がされているとはいえない。

ただ一方には、いくつかの考慮すべき点も考えられる。つまり、「当事者主体」という考えの前提には「当事者とされる人は、自らの意思で選択から決定することができ、そして支援を受け入れるということを承服なり了解なりしたうえで支援の場に臨んでいる」という無意識な意識が存在しているのではないか、ということである。つまり、この前提に立つことのできない福祉的課題を抱えた当事者はどうなるのだろうか。国民として、市民としての権利である支援を受けることはできないのだろうか。断じてそうではないだろう。大原・横山ら（2011）は、保育所における支援において、日頃から支援を拒む母親の自己決定を促す役割を身近な保育士が担い、安心して頼られる存在になる可能性を指摘しているが、このように当事者が支援を受け入れることを了解できていないとしても、当事者の支援を求める力を高める可能性はあり、支援を活用した生活を送ることができるはずである。

したがって、当事者がその支援を活用できるように、当事者の支援を受け入れることのできる力も高めることのできる支援実践ができることが、支援者には重要になるのではないだろうか。

#### IV 自助・自己責任の時代における新たな支援のあり方の構想

近年、わが国社会全体に、「自助」であるとか「自己責任」という言葉がもうすっかり定着したといっても過言ではない。小泉政権時にセンセーショナルに響いたこの「自己責任」であるが、なにもかもをこの「自己責任」に帰結させてもよいのだろうか。貧困生活に陥ってホームレスとなったり、孤独死に至る人たちも、自分の責任なので何とかしなければならないという思いから、誰にも助けを求めない傾向が強い（NHKクロズアップ現代取材班2010）といった指摘や、現代の社会問題の一つである「ニート」「引きこもり」は、この自己責任の結果として生まれており、引きこもるという行為は、過剰に自己責任にとらわれた結果である（村澤・山尾・村澤 2012）といった指摘もある。また、犯罪者になる人には、一人で頑張ることや、弱音を吐かず人に迷惑をかけないこと、弱い自分を出すことができない人が多い（岡本 2013）とも指摘されている。これらの指摘から、「支援」が必要であっても「自助」「自己責任」といった観念に囚われていることで助けを求めることができず、「支援」との接点をもつことができないことが推察される。

「自助」や「自己責任」がクロズアップされる現代の私たちの社会において、支援を必要としているが何らかの事由によって他者に支援を求める力を持つことができていない当事者こそ、支援、つまり他者との接点をつくる必要性があるのではないだろうか。支援を提供する側が、どうしたらこの接点をつくることのできるかについて、「当事者主体」の視点に立って早急に検討しなければならない。

そこで、まず、支援を求める力をもとに、それを高・低という物差しを用いながら、類型化を試みた。人に支援を求めることができ、その結果自分の力で問題を解決できる力（これを「求援力」と呼ぶ）を持っている当事者を高CLとする。一方で、支援を求めることなく、結果的に問題が放置されてしてしまう当事者を低CLとする。そうすると、当事者のもつ力によって、大きくには二つに類型化することが可能となる。

さらに、支援の目的等に応じた類型を試みた（表1）。これは、いわゆる福祉的支援、支援を求めるサインやシグナルを表出する力を高めるアプローチ、人からの支援を受け入れる力（これを「受援力」と呼ぶ）が乏しい当事者に対する受援力を高めるアプローチの三つの類型化である。ここでは、この3つの支援をそれぞれ仮に「支援①：いわゆる福祉的支援そのもの」「支援②：求援力を高めるアプローチ」「支援③：受援力を高めるアプローチ」とする。

いわゆる福祉的支援を必要とする当事者全てに支援を行き届かせるためには、いわゆる福祉的支援（支援①）だけを展開するだけでは不足である。支

表 1 受援力を高めるアプローチの三つの類型化

支援①：いわゆる福祉的支援そのもの
支援②：求援力を高めるアプローチ
支援③：受援力を高めるアプローチ

援を求める力が弱い低CLに対して、支援を求めるサインやシグナルを表出する力を高めるアプローチ（支援②）を行わなければならない。さらに、仮に人からの支援を受け入れる力（受援力）も乏しい当事者に対しては、受援力を高めるアプローチ（支援③）も行わなければならない。

このように、まだ仮説的であるが、本稿で「求援力」と「受援力」をカギとしつつ、これからの時代における新たな支援のあり方を構想することができた（図2）。

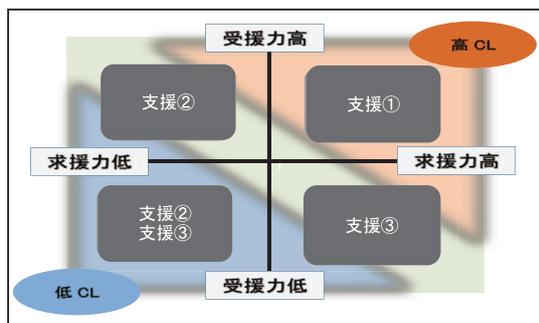


図 2 求援力・受援力

しかし、まだまだ仮説的なレベルでありため、今後は、調査研究を進めながら、必要な修正を行いつつ、高めていくこととする。

## V おわりに

本稿での議論の構想には、筆者らが福祉実践現場でかかわった多くの当事者との出会いがある。一人ひとり福祉的課題を抱える当事者にとって、「支援を求める力・受け入れる力」、すなわち「求援力・受援力」を高めていくために支援者に何ができるのか、「支援を求める力・受け入れる力」を高めることのできる支援とは何かについて、今後も検討を進めていく必要性を強く感じる。

また、自助・自己責任が問われる現代社会において、自助とは何なのか、自己責任とは何なのか、ということはこの「支援を求める」こと、「支援を受け入れる」ことを検討することとおして、あらためて考えていきたい。

今後は、具体的な福祉課題に関する現象に注目した調査研究を行い、さらに、「求援力」「受援力」に関する知見を深めていくこととする。

## 文献

- 本荘雄一・立木茂雄（2013）「東日本大震災における自治体間協力の「総合的な支援力」の検証－神戸市派遣職員の事例から－」, 地域安全学会論文集（19）, 1－10.
- 小嶋玲子（2007）「子育て支援研究の新しい視点－援助要請行動,被援助志向性からの検討」桜花学園大学保育学部研究紀要(5), 1－17.
- 宮本真巳（2015）「受援力に関連する諸問題について－災害支援からセルフケア支援まで－」日本保健医療行動学会雑誌（30）1, 81－86.
- 水野治久・石隈利紀（1999）「被援助志向性, 被援助行動に関する研究の動向」教育心理学研究（47）, 530－539.
- 村澤和多里・山尾貴則・村澤真保呂（2012）「ポストモラトリアム時代の若者たち－社会的排除を超えて－」, 世界思想社.
- 諸井泰子（2012）「乳幼児を持つ母親の子育てにおける援助要請行動：自律的援助要請・依存的援助要請を視点とした検討」, 有明教育芸術短期大学紀要（3）, 29－40.
- 中神友梨・天岩静子（2011）「母親の子育てに関する援助要請及び要請への心理的抵抗」.信州心理臨床紀要（10）, 53－64.
- 内閣府（防災担当）（2010）「防災ボランティア活動の多様な支援活動を受け入れる－地域の『受援力』を高めるために」.
- 永井知子（2016）「子育て支援領域における援助要請研究の概観と今後の課題」, 四国大学紀要（A）46, 69－80.
- 中村美智子（2013）「乳幼児をもつ母親の育児ストレスとソーシャルサポートとの関連：援助要請抑制要因の観点から」, 発達人間学論業(17), 49－67.
- NHKクローズアップ現代取材班（2010）「助けてと言えない－いま30代に何が－」, 文藝春秋.
- 大原麻由・横山順一・横山和恵（2011）「多くの問題を抱える家庭への保育所における支援－保育所長へのインタビュー調査を通して－」,山梨学院短期大学紀要（31）,15－26.
- 岡本茂樹（2013）「反省させると犯罪者になりませぬ」, 新潮新書.
- 高木健志（2013）「精神保健福祉士による退院援助実践に関する考察（その1）」, 山口県立大学社会福祉学部紀要（19）, 37－48.
- 高岡昂太（2008）「子ども虐待におけるアウトリーチ対応に関する研究の流れと今後の展望」東京大学大学院教育学研究科紀要（48）, 185－192.
- 竹ヶ原靖子（2014）「援助要請行動の研究動向と今

自助・自己責任の時代における新たな支援のあり方を考えるー福祉的課題を抱えた人の「支援を求める力・受ける力」の可能性に着目するー

後の展望ー援助要請者と援助者の相互作用の観点から」東北大学大学院教育学研究科研究年報62(2), 167-184.

田中 響(2011)「妊婦のサポート希求力ーフォーカス・グループ・インタビューからの因子分析ー」園田学園女子大学論文集(45), 85-105.